

若者の声



医療保育科演習 (子どもと健康) 風景

特集 来て、見て、体験! オープンキャンパス

■ 教職員研修講演会報告

■ FD・SD講演会報告

■ オベレッタ発表会

■ 公開講座報告

■ 授業・実習風景⑥

■ 教員の活動紹介⑨ / 先輩から後輩へ⑨

■ 受賞 / 教職員紹介 / キラリ いい顔①

■ インフォメーション

特 集

来て
見て
体験!

オープンキャンパス



平成十九年度のオープンキャンパスは「オープンキャンパス専門委員会」が中心となり、企画しました。各回にメインテーマを設定し、新たな試みとして入試問題解説講座を開催、各学科の紹介内容もこれまで以上に工夫を凝らしています。



面接の受け方講座



相談コーナー

2007年オープンキャンパスの日程

	日 程	メインテーマ
第1回	5月26日(土) 13:00~16:00	はじめの一步はオープンキャンパス!
第2回	6月17日(日) 13:00~16:00	教えます! 川崎医療短大の入試と中身
第3回	7月29日(日) 10:00~15:00	めざそう! 医療・福祉・保育の専門家
第4回	8月25日(土) 13:00~16:00	ワン・アンド・オンリー -川崎医療短大でしか学べないこと-
第5回 (学園祭)	10月13日(土) 10:00~15:00	広く知ろう! 川崎学園ネットワーク
	10月14日(日) 10:00~15:00	

全体説明会

今年度のオープンキャンパスは、入試問題の解説等受験生に役立つ情報が満載です。

第二回(第四回オープンキャンパスでは、平成二十年度の入試概要の説明、昨年度入試問題の解説が行われました。入試概要は、AO入試の導入をはじめ、今回変更された点が詳細に説明されました。入試問題の解説講座では、国語・英語・数学・理科(物理・化学・生物)および小論文の入試問題が解説され、さらに、面接の受け方についても説明が行われました。受験生やご家族の方が熱心に耳を傾けメモをとる姿が見られ、受験勉強の参考になったという声も聞かれました。

今年度から全体説明会の進行は、各学科のオープンキャンパス専門委員会が中心となり、各学科が一回ずつ担当を務め、実施することになりました。第二回オープンキャンパスでは、介護福祉科の学生が手話で開会の挨拶を行うなど、在学生も参加しての全体説明会となり、会場は活気にあふれていました。



熱心にメモを取る参加者

各学科の見学・体験

模擬講義・実習体験など盛りだくさんの内容に、受験生の興味がふくらみます。

看護科

■模擬講義と実習

小児看護学の一環として「こどもの観察」をテーマに、小児のバイタルサイン測定の模擬講義と実習を実施しました。模擬講義の参加者は、こどもの特徴を理解して、正確に測定する技術について学びました。また、実習では、バイタルサイン人形の心音を聴診器で聞いたり、脈に触れたりして、人形の胸郭の動く様子に驚きながらも呼吸数を一生懸命数えていました。



老年体験実習
財布から小銭を取り出すのも難しいですね

小児看護体験実習
新生児の実物大の人形で重いですか？



■高齢者の生活体験

視野が狭くなるメガネを参加者に装着してもらい、小銭を財布から出したり、文字を読んだりする高齢者の生活体験をしました。お年寄りの不自由さや、気持ちを多少なりとも共感することができたようです。

■在学生との懇談・進学相談

在学生との懇談や進学相談では、入試に向けた心構えや、具体的な教科の学習方法などについて質問がありました。在学生は先輩として、自分たちの経験をもとに真剣にアドバイスをしていました。入試だけでなく、入学後の学習や学生生活についてもリアルに伝えていたようです。ある男子参加者は、入学後の不安をなげかけていましたが、本学の男子在学生の丁寧な対応で不安が解決し、和やかな雰囲気での話が進んでいました。

このように看護科では、人との触れ合いを第一に考え、看護の楽しさを体験していただくオープンキャンパスを目指して取り組んでいます。

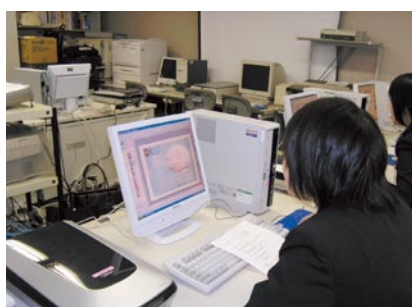
臨床検査科

■オリジナルカレンダーの作製

医療情報学でパソコンを使用することから、マルチメディア体験学習としてオリジナルカレンダーの作製を行いました。短い時間の中での作製でしたが、ちよつとした記念の品ができ、満足そうな参加者の顔が見られました。

■ミニ講義・体験実習

ミニ講義や体験実習は、毎回趣向をこらしました。「医動物学から世界、特に発展途上国を考える」というテーマでは、実物大の寄生虫標本や顕微鏡での虫卵観察を実施した



マルチメディア体験
満足のいく作品ができたでしょうか



体験実習 寄生虫は初めてですか？

り、メタボリックシンドロームに関するミニ講義を血液型や分析検査の体験実習と組み合わせたり、実際に培地や顕微鏡で微生物を観察しながら、微生物に関する話を加えたりしました。なかでも、体験実習では、在学生が参加者の各テーブルにすわり、参加者の近くで個別に対応を行い、好評でした。実習や講義で学んだことについて、在学生が一生懸命説明する姿に好感を持っていただけようです。

■進学相談・在学生との懇談会

本学科の教育方針や就職・国家試験に関する概要などを専任教員が説明しました。在学生も加わり、学生生活や授業の様子など具体的な内容についての質問にも気軽に応じています。教員と学生の関係や実習の内容などかなり突っ込んだ話を聞くことができ、なまの臨床検査科を知る良い機会です。

■中央検査部見学会

日程によっては、希望者に対し、川崎医科大学附属病院中央検査部の見学も実施しました。実際に技師が働いている姿は見ただけませんが、検査がどのような場所で行われ、どのような機器を使用しているかなどは理解していただけたと思います。



在学生との懇談会
和やかに話ができたとと思います

放射線技術科

■学科紹介

カリキュラムの内容や三年間の行事予定などを解説しました。どのような大学生活を送るのかを具体的に知っていただく良い機会となりました。

■面接方針説明

全体会で行われた「面接の受け方講座」が一般的な面接対策であるのに対し、本学科に焦点をあてた面接での着目点、期待する学生像、面接評価の方法などを具体的に説明しました。本番の入学試験の面接できっと役立つことでしょう。

■体験実習

「X線撮影体験」、「放射能測定」など、診療放射線技師の業務内容を疑似体験してもらいました。診療放射線技師にますます興味をもってくれたようです。

■進学相談

参加者の質問に対して在学生在が回答しました。入学試験の思い出、大学での生活状況、授業の様子など、実体験を交えた忌憚（きたん）のない回答が、参加者に好評でした。

■附属病院見学

短大に併設されている川崎医科大学附属病院の中央放射線部を訪問し、診療で使っているMRI、CT、核医学検査などの施設を見学しました。装置などの説明もあり、



面接方針

真剣な眼差しで聞き入る参加者たち。説明を書き留める熱心な参加者もいらっしゃいました。



X線撮影体験

やや緊張しながらも、笑顔がこぼれる雰囲気の中での体験学習でした。人気のあるイベントの一つです。



放射能測定

介護福祉科

■学生インタビュー

在學生へインタビュー形式で、講義の様子、介護に対する思い、実習の内容など、自分自身の体験したエピソードを加えて詳しく説明してもらいました。少人数のグループで行うため、きめ細かく話をすることができました。

■調理体験

高齢者向けのゼリーやつるんとした豆腐白玉団子など、高齢者の食事とはどのようなものなのか、実際に調理実習をして食べてもらいました。また、介護福祉士や管理栄養士による食事についての専門的なミニ講義も併せて行い、食事の大切さを知ってもらいました。

■手話体験

手話を身近に感じてもらうため、最近流行った曲を在學生と歌いながら、それを手話で表現してもらいました。最初はやや難しい様子でしたが、在學生が丁寧に指導してくれました。



手話体験

■高齢者体験・介護体験

参加者に写真（最下段）のような衣服を着てもらい、高齢者の不便さを体験してもらいました。介護者の負担が少ない介助を実践するにはどのようなしたら良いのか、

また、高齢者の持っている力を使って起き上がるための介助方法や、車椅子への移乗をどのようにしたら良いかを在學生と一緒に考えながら学んでもらいました。



介護体験

どのようにしたら良いだろう？
在學生と共に考えながら体験しています。

医療保育科

■「カプラ」体験授業

本学科の体験授業では「カプラ」という細長い白木の板を使って、子どもの遊びを



補助学生（3年生）

休日を返上して手伝ってくれました。ありがとうございます。



進学相談

参加者にとっては、教員よりも在學生の方が気軽に相談できるようです。



病院内見学

■感覚統合法体験
 感覚統合法では、トランポリンやブランコを使ったダイナミックな遊びや、水の代わりに小さいボールがたくさん入ったお風呂にかかる静かな遊びなどをします。このような遊びを通して、「触れる、揺れる、姿勢を保つ」といった感覚情報を適切に統合できるといわれています。



3人でトランポリン



カプラ体験授業

みんなで作った作品の数々です

体験してもらいました。カプラを重ね合わせ、球体ができあがると、参加者から思わず、「すごい！」と声があがりました。さらに、当日の進行を担当した在学生と参加者が一体となって、積み上げる高さを競ったり動物に形作ったカプラに実際にまたがったりしました。

対象は、LD（学習障害）や自閉症などの発達に障害のある子どもが中心ですが、さまざまな場面で用いられています。
 この日は、参加者にトランポリンやブランコを体験してもらいました。遊園地のような雰囲気、参加者から笑い声と歓声があがりました。
■小児救急処置法体験
 「小児救急処置法」の体験授業では、まず、「救命の連鎖」として、通報→住民の救急手当て→救急隊の処置→病院の処置という流れについて説明しました。特に、救命率の向上を目指した「住民の救急手当て」の必要性を強く訴えました。参加者は、「なるほど」といった様子で聞き入っていました。
 次に、捻挫や打撲などの固定の必要があるケガに対する「包帯法」について、実際に体験してもらいました。これは、二人一組でケガをした人と手当てをする人に分かれ、説明を受けながら見よう見真似で取り組んでいました。親子で体験に参加されたペアの方では、保護者の方から「こうするんだよ」と説明を受けたお子さんが「へえー」と驚いていたのが印象的でした。



小児救急処置法体験



熱心に聞き入る参加者

「こうやってするんだあ」

初めてのAO入試 一次面接開始！！

～計68名の受験生が挑戦～



看護科、介護福祉科および医療保育科では今年度からAO（アドミッション・オフィス）入試が始まりました。この入試は、志望動機や入学意欲などを重視し、本学への進学意思が確実であることが条件とされます。一定期間内にエントリーを行ってもらい、7月29日と8月25日のいずれかのオープンキャンパスで一次面接を行いました。初めての試みでしたが、多くの方がエントリーされました。受験生はオープンキャンパス当日、緊張した面持ちで一次面接を受けていました（最終ページに関連記事）。

受験に役立つ オープンキャンパスです。

◎放射線技術科 准教授 荒尾信一先生



入試解説講座で小論文の書き方について話をした荒尾先生。
 「本年度のオープンキャンパスは、全部で5回開かれています。第2回～4回のオープンキャンパスでは新しい試みとして、入学試験問題の解説講座を実施し、好評でした。私は、第2回オープンキャンパスで小論文試験について、昨年度の出題の概要と受験に際してのポイントを解説しました。これらを是非とも受験に役立ててほしいですね。」と受験生にエールを送られました。

「楽しかった」という声が 私たちの励みです。

◎臨床検査科 2年 勢井麻梨さん



第2回オープンキャンパスで、参加者に寄生虫の説明をする勢井さん。毎回のようにオープンキャンパスの補助学生として積極的に参加してくれました。
 「参加して人に説明することの難しさを改めて実感しています。自分の知識の足りなさや不明瞭なところを明確にでき、とてもいい勉強になっています。また、皆さん熱心に話を聴いてくださり、参加者の方から「楽しかった」という声をいただきとても嬉しかったです。体験実習や進学相談が今後の進路選択に役立てばこんな嬉しいことはありません」といきいきと語ってくれました。

学生―教職員間の コミュニケーションスキルの向上を目指して

学生生活委員会では、①学生の大学生活に対する満足度をあげ、②よき社会人としての資質を育むために様々な取り組みを行っています。その一つとして、多様な学生に対応していくため、教職員の意識やスキルを向上させる試みを始めています。

今年度は、高機能自閉症などの発達障害が疑われる学生への理解を深め、その対応を学ぶための企画として、七月二十三日、自閉症療育の第一人者である佐々木正美先生に標記の講演をお願いしました。発達障害については、近年、多くの大学で問題視されるようになり、悩みを持つ学生の中に発達障害の学生が多く含まれていることもわかってきています。一方でほとんどの教職員が発達障害のことは何も知らない状態です。コミュニケーションで悩んでいる学生の状態を少しでも理解したいと、授業時間帯にもかかわらず、六十三名の教職員が参加しました。

まず、佐々木先生は、自閉症は発達の不均衡であることを強調され、診断基準として、コミュニケーションの異質性、興味や関心の偏り、「社会性」の発達の遅れの三点を挙げられました。そして、その特徴について一つひとつ事例を挙げて説明されました。例えば、高機能自閉症の学生は、話すことはできるのですが、相手の言うことを理解する力が弱いそうです。そのため教



佐々木正美先生

職員からの指示に対して十分に配慮することができません。また、冗談

と本気の区別ができない、「場の空気を読む」ことが不可能に近い、複数の情報を一度に処理させようとすると混乱する、といった特徴があります。特に、高機能自閉症の場合、障害の特徴が一見わかりにくいことから、「怠けている」とか「態度が悪い」と誤解されがちです。そのため、このような障害をかかえる学生の中には、周囲の無理解から二次的情緒障害を起こし、勉強に対する無気力や教師に対する反抗、犯罪行為、ひきこもりといった事態に陥る者も少なくないということです。先生は、生来的な特異性があることを知って対応すれば、こういった学生も学業を進めていくことが可能であるので、教職員の理解と適切な対応が求められると強調されました。例えば、短く具体的な内容で話す、メモ書きを渡して指示する、まず長所を取り上げてから「できない」ことに触れるなど、相手の状態に教職員が合わせていくことが大切だということでした。

質疑応答では、具体的な判断や対応について熱心な質問が続き、佐々木先生はそれぞれに対して一つひとつ丁寧に答ええくだ

さいました。参加した教職員からは「実際にこの障害が疑われる学生もいるので、対応の仕方など大変参考になった」「臨機応変な対応が求められる医療職には不向きというところで、学生に進路変更を促さなければならぬ場合もある。学生や保護者への対応についてもっとお話を伺いたい」という声があがっていました。

学生生活委員会では、今後も学生支援の強化を目指して、教職員研修講演会を企画していきたいと思っています。現在、学生の悩みを少しでも軽減するため学生相談室の充実を図り、寮生活アンケートの実施や、

学生の生活指導のためのガイドライン作成も行っていきます。大学が、個々の学生にきめ細かく対応していく時代にいったことを自覚し、全学的に学生支援に取り組んでいきたいと考えています。



(学生部長 名木田恵理子)

上海職工医学院代表訪問団が 川崎学園を表敬訪問

昭和六十二年に川崎医療短期大学と友好提携を結び、以来、友好的学術交流を深めている上海職工医学院訪問団五名が、去る六月五日(火)から八日(金)までの四日間、川崎学園を表敬訪問されました。目的は、本学および医科大学、現代医学教育博物館、附属病院、医療福祉大学の施設の見学でした。張鋼副院長を団長とする訪問団一行は五日昼、岡山空港に到着し、直ちに本学へマイクロボスで直行されました。



本学玄関前では、多数の教職員の手によって掲げられた「上海職工医学院代表団熱烈歓迎」の横断幕と大きな拍手に迎えられ、会議室での歓迎式に臨まれました。本学出席者を代表して、守田学長からの歓迎の挨拶があり、続いて、上海職工医学院を代表して張鋼副院長から返礼の挨拶がありました。



その後、本学の内容がビデオで紹介され、各学科の主任を中心としたメンバーと懇談会が行われました。その後の施設見学では、看護科の基礎看護実習室を始め、各学科の特色ある実習室等を熱心に視察されました。特に、訪問団の専門領域に関しては質問も相次ぎ、両校の教育の実状と今後の医療に関する教育のあり方等について意見交換が行われ大いに実りある見学となりました。

翌日以降は医科大学、医療福祉大学、附属病院川崎祐宣記念講堂などを見学され、大きな感銘を受けられたようです。今回の訪問によって交流がさらに深まり、友好の絆が強まったと確信しています。

本学学生の日本語力とその向上を目指す教育について

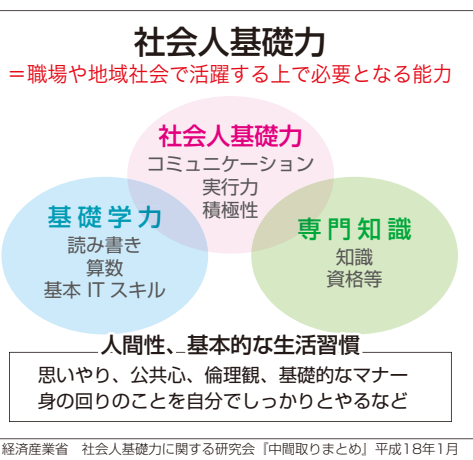
FD (Faculty Development)・SD (Staff Development)とは、「教職員が授業内容、方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みのことを指します。このような教職員の資力向上の取り組みの一環として、平成十九年度FD・SD講演会において「本学学生の日本語力とその向上を目指す教育について―ブレースメントテストの結果を踏まえて―」(平成十九年七月十九日)と題してお話しました。そのことをふまえ、日本語ブレースメントテストと日本語力向上の取り組みについて述べさせていただきます。

本学では、今年度から四月に一年生を対象とした、日本語ブレースメントテストを実施しています。このテストは、大学の講義を理解する日本語能力を測ることを目的としています。

したがって、このテストを実施することによって、日本語の語彙力を知ることができません。ただし、レベルが低いからといって、落ち込む必要はまったくありません。この弱点を克服することによって、社会人基礎力として必要な問題解決能力を身に付けることになるからです。これによって就職や編入学の際に面接や自己PRで、入学時に語彙力がないことが分かったから、それを克服するように努力したということが言えるようになります。つまり、弱点が社会人になるときは、最大の長所へと変化するので。しかし、ただ漫然と毎日過ごしていたのでは、弱点が弱点のまままで終わってしまいます。ですから、本学ではそのための方策も考えています。

その一つとして、レベル別に「文章表現講座」を開講しています。また、自主学习によって日本語力を向上させるために、日本語に関

する検定試験も本学で実施できるよう準備を進めています。まず、手始めに漢字検定を十月二十八日(日)に実施する予定です。すでに、就職にも有利であるという理由から、二級を中心に受験希望者が集まっています。大学に必要な日本語力は、語彙力だけではありません。ですから今後は、実習ノートやレポートを書くための文章力の向上なども視野に入れ、専門教育への橋渡しとなるように取り組んでいきたいと思っています。



招待状

医療保育科

オペレッタ発表会



ブレイメンの音楽隊



2匹のオオカミと10匹の子ヤギ

7月27日(金)、医療保育科3年生によるオペレッタ発表会が開催されました。オペレッタとは、音楽に合わせて物語が展開する「音楽劇」です。保育士や幼稚園教諭といった子どもにかかわる仕事を目指す学生にとって、実際にオペレッタを演じることは大切な意味があります。それは、演じる者の気持ちやみんなで作る過程を体験することで、お遊戯会や演劇発表会で子どもを指導する際に、とても強みになるからです。

発表は6グループに分かれて行いました。各グループのテーマは、「白雪姫」、「おもちゃのチャチャチャ」、「ブレイメンの音楽隊」、「2匹のオオカミと10匹の子ヤギ」、「オズの魔法使い」、「スイミー」です。

医療保育科として初めての取り組みであったため、学生も教員も手探りのままのスタートでしたが、どのグループもまじめに取り組み、大変活気がある発表会になりました。学生は実習で忙しく、また練習場所が限られているにもかかわらず、授業前や放課後を使って熱心に練習に励みました。発表会を終えて、ある学生は「やっていると準備とか、集まりとか面倒くさかったけど、終わってしまうと寂しい」との感想をもらっており、学生の心に大きなものを残した発表会となりました。



白雪姫

平成十九年度第一回公開講座報告

医療の専門性を持つ保育者の育成と課題

平成十九年六月十六日（土） 十時十五分～十二時十五分、本学体育館において平成十九年度第一回公開講座「医療の専門性を持つ保育者の育成と課題」が開催されました。当日は晴天に恵まれ、地域の保育関係者や他大学の保育学生を中心に三百名を超える参加者を迎え、保育の現代的課題について議論を深めました。

本講座は、サブタイトルを「発達障害児・病児の保育と子育て支援」とし、発達障害児と病児にかかわりの深い研究者と保育者、計四名がパネリストとなり、保育者（保育士・幼稚園教諭）に求められる医療の専門性について、日々の研究や実践に基づき報告しました。

まず、コーディネーターの医療保育科中原朋生が「保育現場では①発達に障害のある子ども、②感染症にデリケートな乳児、③病気を患う子どもへの保育など、保育者に医療の専門性が必要となる場面が多くなっているのではないか」との問題提起を行いました。



パネリストとコーディネーターの先生方

問題提起を受け、前半は発達障害児について議論しました。まず研究者の立場から

国立特別支援教育総合研究所の笹森洋樹総括研究員が、「保育者に求められる特別支援教育」について報告しました。笹森氏は、障害がある子どもの発達を、複数の保育者が協力しながら支援することが重要であるとし、保育計画の共有化など保育者の協体制づくりの重要性を指摘されました。

続いて、保育者の立場から東広島市サムエル保育園の津川典子子育てセンター長が、「発達障害児の保護者への子育て支援」について報告しました。津川氏は、保育者自身が「障害」という言葉に不安を抱き、「自分では保育できない」と自信をなくしてしまうケースが多いとし、障害に関する「知識」を一人ひとりの子どもを理解するための「知恵」に変えていく必要性を指摘されました。

後半は、病児の保育について議論しました。研究者の立場から医療保育科の寺田喜平教授が、「保育者に求められる医療の専門性」について報告しました。寺田教授は、保育者に必要となる医療の専門性について、「救命救急」と「感染症予防」を挙げ、医療の基本的な知識が子どもの命を救い、感染症を予防する大きな力になることを力説

されました。

また、保育者の立場から兵庫県立こども病院中村直子病棟保育士が、「保育者に求められる医療保育」について報告しました。中村氏は、日々、血液病棟において病児の保育に取り組み実践者であり、病院における医療保育の実践について説明され、「子どもに苦痛を与えず、子どもの絶対的な味方」としての病棟保育士の役割を強調されました。



講演を聞き入る参加者

以上、各講師の熱のこもった報告によって、あつという間に予定の二時間がたち、医療と保育の連携をめぐる論点を提示することで盛会のうちに公開講座を閉じました。

なお、今回の公開講座は、文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム」事業の一環であり、岡山県内の九つの保育者養成校が持ち回りで実施する子育て親育ちフォーラム・地域大学間連携シンポジウム（主催岡山大学）の一部として実施されました。そのため、他大学の教員・学生にも多くの参加をいただきました。そのなかで「内容もさることながら、学生・職員・教員が協力し運営され、とてもよい雰囲気だった」との感想が多く寄せられました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

（医療保育科 中原朋生）

事務部から

役立つマナーを身につけましょう



事務部庶務課 重政 有里

学生のみなさんは、学内のエレベータをよく利用していると思います。例えば、エレベータを待つているとき、先生がいらつしました。エレベータに乗る順番は分かっていますか？答えは、自分が先です。操作盤の前に立ち、扉が開まらないよう押さえて、それから目上の方に乗っていただきます。では降りる時はどうでしょうか。今度は目上の方が先に降ります。もちろんその間、扉は押さえておきます。知っている方は、もう実践していることと思いますが、知らなかった方は今日から実践してみてください。

将来、みなさんの多くが医療・福祉保育の現場で働くと思います。患者様やお客様などと接する機会はほぼ毎日でしょう。その時に、きちんとしたマナーが身に付いていれば、受けた相手はとても気持ちの良いものです。そして、その個人の評価が高まるだけでなく、その施設全体の評判にもつながります。

この他にも、電話をかけたら（受けたら）まず名前を名乗る、部屋に入るときには挨拶をするなど、もし知らなければ恥をかきような基本的なマナーもあります。

本で読んでもなかなか覚えられませんから、見て、動いて、少しずつ身に付けていきましょう。社会に出た時に自信を持って働けるよう、今のうちにしっかり学んで、実践してください。

介護福祉科 (家政学実習)

介護福祉科 河辺 聡子

介護福祉士の職務は、高齢者や障害者など介護を必要とする人々のQOL(生活の質)やADL(日常生活動作)の向上を図る心理・社会的な支援です。これらを実現するため、介護福祉士の教育カリキュラムには、あらゆる支援活動の基礎となるコミュニケーション技術(占字や手話も含む)の習得にはじまり、日常的な生活技術、心身の介護技術の習得、個々の利用者に適した介護過程の展開方法の習得などがあります。

学生は二年次の「家政学概論」で、利用者の「衣・食・住」に関連した生活支援技術の基礎を身に付けます。「食」に関しては、栄養学や食品学などを学び、さらに「香川式四群点教法」を習得し、簡単な栄養価計算ができるよう求められます。「衣」と「住」では、高齢者や障害者が安心できる衣生活安全に暮らすことのできる住環境について学びます。そして、二年次の「家政学実習」において、これらの知識を実践に移します。

家政学実習Ⅰ(栄養・調理)

本学科に入学した学生の多くは、カリキュラムの中に調理実習も含まれることに驚きます。しかし、ユニットケア形式の施設、グループホーム、居宅など介護福祉士の職場では、利用者のために食事を提供する場合があります。したがって、調理技術の獲得は非常に重要です。

①基礎的な調理技術の習得

本学科の学生は自宅通学生が多く、幸か不幸か、料理をしなくてもすむという恵まれた(?)環境で生活しています。そのためか野菜を切る、洗うことすらままならない学生が多く、実習は常

にゼロからのスタートになります。まず、作業しやすい調理道具の配置方法、調味料、材料の計り方など調理の基礎を習得します。続いて、味覚に関する感覚を自覚させるために、五味(甘味、塩味、酸味、苦味、うま味)の識別実習を行います。

②汁菜(煮・蒸・炒・揚げ)を基本とする調理実習

一回の食事では、どのような料理を揃えることが望ましいかを学びながら、献立に従って調理をします。担当教員は、高齢者に好まれる日本料理をコンセプトとし、下処理から盛り付けまでデモンストラクションを行い、学生に試食させます。その後、三人程度のグループ毎に実際の調理実習を四回実施します。この時、調理のみならず、配膳、下膳、後片付けなどの指導も厳しく行います(写真1～3)。

③実技試験ⅠとⅡ

①と②の実習終了後、実技試験を行います。学生はグループ毎に自分たちに必要な栄養量を計算し、指定された材料を使って汁菜の四品が整った献立を考え、調理し、お互いに講評し合います。この頃になると、彩り、食材料の切り方、硬さ、食べやすさ、そして盛り付けまで考慮して仕



写真1 副菜として 煮物…かぼちゃの甘露煮、大根と豚バラの煮物、かぶと厚揚げの煮物(二種類)、筑前煮

上げられるようになります(写真4～5)。学生らしい発想豊かな料理満載で、楽しみなひと時です。



写真2 主菜 煮魚、だし巻き卵、ふくさ焼き



写真4

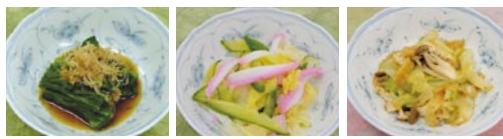


写真3 副菜として 浸し物…ほうれん草のお浸し、キャベツと油揚げの煮浸し 酢の物…キャベツときゅうりの酢の物



写真5

家政学実習Ⅱ(被服・住居)

①被服

「介護福祉士と被服、なぜ?」と、不思議に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、これにはしっかりと理由があります。

利用者の衣類の着脱は、介護のなかで頻繁に行われる支援の一つです。なかでも、自立した生活を希望する高齢者や障害者の衣類の着脱は、利用者一人ひとりの状況に応じて行なう必要があります。近年、ユニバーサルデザインの衣服が多く市販されていますが、身近にある衣類を一部改良す

ること
で、これ
らを必
要とし
ない良
い方向
に導け
る場合
があり
ます。また、ちょっとした工夫によって、介助なし



実際に学生が製作した改良着を試着し、説明している様子。ワンピースの前を切り、マジックテープで留めて着脱しやすいように工夫しています。

で衣類の着脱が容易にできるようになる場合もあります。改良衣を上手に作ることはプロに任せるとしても、衣類の改良を提案する能力を身に付けることは、非常に有益であると考えているのが被服の実習が必要な理由です。さらに、もともと現実的には、仕事の中でボタンを付ける、ほころびを直すなど簡単な裁縫が必要な場合が多々あることも理由の一つです。

したがって実習では、並縫い、まつり縫い、ホック付け、ボタン付けなどの基礎的な裁縫技術を学び、その後、各自で様々な利用者の障害を想定した改良衣や小物を作成します。その他に、リハビリやレクリエーションに役立つように、指あみやしほり染めなども学んでいます。

②住居

「バリアフリー」という言葉をご存知ですか?

高齢者や障害者が身体的にも精神的にも障壁を感じない生活が営める環境をいいます。これらを実現した住まいは、介護予防や、介護負担の軽減につながります。この実習では、キッチン、浴室、トイレなど一般の家庭環境を模した設備を用い、高齢者や障害者に適した安全で快適な住まいのあり方について学びます。様々な角度から住環境を考え、具体的な改善箇所を提案したり、実現に必要な設備や機器について考えたりします。

教員の活動紹介⑨

「透過性調整力」の向上を目指して
—「豊かな人間性を育む」ために—

看護科 准教授 太田米子（在宅看護論）



看護科では、「豊かな人間性を育む」ことを大きな目標としています。時代とともに変化する学生の気質に合わせ、現在私たちが取り組んでいる教育活動を報告します。

看護の仕事は人と直接関わることから始まります。いかに知識や技術があっても相手を思いやる気持ちがいなければ、患者に寄り添った看護は実践できません。そのためには、それぞれの場面において相手のおかれている状況を理解し、対応することが必要です。学生が、相手の状況に合わせた対応を身に付けることは、一筋縄ではいきませんが、臨地実習の各部署で様々な体験をし、経験を積み重ねていくことで、これらが身につけられます。しかし、最近、問題となつているのが、実習を主体的に行うことができない学生、実習に適応できなくな



各領域実習終了後の個人面接

る学生が増加傾向にあることです。状況に合わせて適応する能力は、「透過性調整力」と呼ばれていますが、看護科では数年前から特性

調査PC-TALK（適正科学研究センター実施）を導入し、実習前後における「透過性調整力」の変化を客観的に評価しています。多くの学生の「透過性調整力」は、当然のことながら実習開始前（二年次）に比較し、実習終了後（三年次）のほうが高くなりま

す。このことは、刻一刻と状況が変化する医療現場で実習することで、「透過性調整力」が高まるためと考えられます。しかし、前述のように、実習を主体的に行うことができない学生や実習に適応できなくなる学生の「透過性調整力」は低くなります。

「透過性調整力」の低い学生への対応策として、実習終了後、各実習部署の担当教員が一人ひとりの学生と面接を実施することにしました。面接では、それぞれの領域の実習において学生の優れている点、努力が認められる点や改善すべき点を伝えるなどの指導を行っています。その結果、「透過性調整力」が高くなつていきます。

最後に、時代とともに学生の気質は変化していますが、秘められた能力は計り知れないものがあると信じています。今後、学生の状況を見ながら指導方法を改善することにより、すべての学生の「透過性調整力」が高められ、豊かな人間性を持った学生を育てられるよう取り組んでいきたいと考えています。

先輩から後輩へ⑨

大切にしているもの

国際医療福祉総合学院 臨床工学科 重森 幸子（臨床工学科士期生）



現在、私は、広島にある専門学校で臨床工学科の教員をしています。全四学科、約四百五十人の学生がいます。臨床工学科はクラス四十名、三学年が国家試験合格に向けて講義、実習に励んでいます。

私は川崎医療短期大学を卒業して、広島県のフェニックスクリニックに就職し、五年間臨床工学技士として透析業務に携わりました。患者さんは、二日に一度透析治療を受けに来院されます。実際の業務では、穿刺に失敗して落ち込んだり、患者さんとのかわり合いの中で、感謝の言葉を掛けられて嬉しい気持ちになったり色々なことを感じました。そのような気持ちです。患者さんへの対応は、すべて患者さんへの思いやりが大切だと思っています。そして、患者さんに的確なアドバイスをして、良い治療を受けていただきたいと思います。



その気持ちだと

さんかか

は勿論のこと、友達や先生とのかかわり合いを大切に、やさしい心を持った向上心のある臨床工学技士になつてほしい。

皆さんも何年か働くと、自分自身の方向性について色々な事を考える時が来ると思います。今やっていることを掘り下げていきたい、新しいことに挑戦したいと考えることがあると思います。そんな時に選択肢の幅が広がるよう、常に勉強しておくことが大切です。

学生時代の講義や実習を大切にすることは勿論のこと、友達や先生とのかかわり合いを大切に、やさしい心を持った向上心のある臨床工学技士になつてほしい。



『金井泉賞』受賞



臨床検査科
山本誠一 講師

平成19年5月17日に宮崎市で開催された第56回日本医学検査学会で本学臨床検査科の山本誠一講師が『金井泉賞』を受賞されました。

この賞は、基金の創設者「金井泉」によって設けられた賞であり、毎年2名が受賞されていますが、今回で最後になることです。長年にわたり職務、技師会活動を通じ後進の育成、社会的貢献に多大な功績が認められ、また、積極的に学術活動に尽力し、優れた業績を残すなど学術的貢献が顕著であったことが認められての受賞となりました。

『厚生労働大臣賞』・『日本看護協会長賞』受賞



介護福祉科
橋本祥恵教授

平成19年5月16日に名古屋市で開催された日本看護協会平成十九年度通常総会において、本学介護福祉科の橋本祥恵教授が「厚生労働大臣賞」を受賞されました。

この表彰は、長年にわたり職務に精励し、看護の向上、後進の育成、社会的貢献に多大な功績が認められたため受けられたものです。



医務室看護職員
瀬戸和子先生

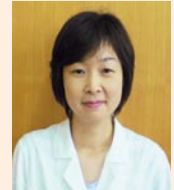
同じく同総会において、本学養護職員、瀬戸和子先生も長年の川崎医科大学附属病院での看護活動や看護協会活動に対する功績が認められ、「日本看護協会長賞」を受賞されました。

新任教職員紹介



庶務課 事務職員
阿藤孝子

久々の母校に懐かしい気持ちで、6月に人事課から異動してきました。学生・教職員の方々の支えになれるよう、微力ですが努めていきたいと思っております。どうぞよろしくお祈りいたします。



図書館 事務職員
中村敦美

6月1日付で福祉大学図書館より配属になりました。図書館員としてはまだ未熟ではありますが、皆さんにしっかり図書館を利用していただけよう頑張りますので、どうぞよろしくお祈りいたします。

第33回川崎学園祭

10月13日(土)・14日(日)の2日間、「円(わ)～YOU&I～」という統一テーマのもと、第33回川崎学園祭が大々的に開催されます。皆さん奮って参加してください。

※「円(わ)」というテーマは、社会生活における「環」、身近な学園生活における「輪」というものをもう一度見つめ直して、自分(I)と周りの人々(YOU)との繋がりの大切さを再認識しようという意味が込められています。



の執行委員長だった先輩からの引継

学生会執行部委員
打ち合わせ



今年度学園祭実行委員長を務めさせていただきます。今年度の学園祭は十月十二日の前夜祭に始まり、十四日まで開催されます。今年の学園祭のテーマは、「円(わ)～YOU&I～」です。学園祭を盛り上げるためには、川崎医科大学、川崎医療福祉大学、川崎リハビリテーション学院、川崎医療短期大学の四校が連携し、今年のテーマの「円(わ)」を演出することが大切です。そのために、私は学園祭実行委員長として、今年の一月から会議を重ね、十月の本番に向けて、話し合いや調整、準備を行っています。昨年、一度は学園祭を経験しているものの、実行委員長としての仕事内容はわからないことばかりでした。昨年の実行委員長だった先輩からの引継

頑張ってます!



看護科 年
橋本武憲さん

学園祭に向けてパワー全開!!

きと、本部会議に参加することで、やっと全体の形を把握できるようになったというのが本音のところ

です。仮装行列のような四校合同のイベントもあれば、二校で催すイベント、各学校単位で催すイベントもあり、三日間で大変多くのイベントが計画されています。今年度は、学科学習などにたくさんの方が来てもらえるように、総合案内を作りたいと検討しています。そして、内容の濃い、充実したイベントが催されるように、早くから模擬店の出店を呼びかけ、盛り上げようと努力しています。一年に一度のお祭りです。学園祭実行委員はじめ、学生の皆さんの協力のもと、川崎学園らしい、お祭りに作り上げていきたいと思っています。学生の皆さんのご協力をよろしくお祈りいたします。そして、是非、たくさんの人に来ていただき、楽しんでもらいたいと思っています。

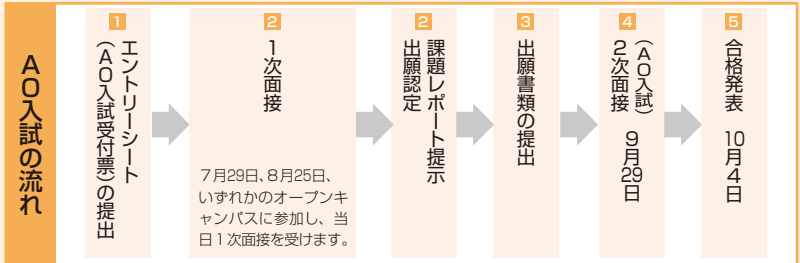
今年度は、学科学習などにたくさんの方が来てもらえるように、総合案内を作りたいと検討しています。そして、内容の濃い、充実したイベントが催されるように、早くから模擬店の出店を呼びかけ、盛り上げようと努力しています。一年に一度のお祭りです。学園祭実行委員はじめ、学生の皆さんの協力のもと、川崎学園らしい、お祭りに作り上げていきたいと思っています。学生の皆さんのご協力をよろしくお祈りいたします。そして、是非、たくさんの人に来ていただき、楽しんでもらいたいと思っています。

主要行事 (10月~12月)

10月	1日	特別入試願書受付開始 (~13日)
	2日	放射線技術科2年生臨床実習開始
	4日	AO入試合格発表 (17:00)
	5日	第26回医療福祉教養講座
	13日	学園祭 (~14日)
		第2回公開講座
		第5回オープンキャンパス (~14日)
11月	20日	特別入試
	22日	第27回医療福祉教養講座 推薦入試願書受付開始 (~11月2日)
	26日	特別入試合格発表 (9:00)
	30日	放射線技術科3年第2回実力試験
	2日	第28回医療福祉教養講座
	3日	第3回公開講座
12月	10日	推薦入試
	12日	介護福祉科第三段階実習 (~12月8日)
	16日	推薦入試合格発表 (9:00)
	19日	看護科2年基礎看護学実習Ⅱ (~12月14日)
	24日	放射線技術科3年卒業研究発表会
	26日	第29回医療福祉教養講座 (開講30回記念)
12月	3日	医療保育科2年保育実習Ⅱ・Ⅲ (~15日)
	7日	第30回医療福祉教養講座
	15日	臨床工学科3年卒業研究発表会
	17日	第31回医療福祉教養講座
	19日	放射線技術科3年第1回卒業試験
	21日	臨床検査科3年臨床実習研究発表会
	25日	冬季休業

はじめてのAO入試

本学では、平成20年度入試から、看護科・介護福祉科・医療保育科の3学科でAO (アドミッション・オフィス)入試を実施しています。



AO入試の特徴は、看護科・介護福祉科・医療保育科に入学することを希望する人の志望動機、入学意欲などを重視する入試です。

オープンキャンパスに参加し、1次面接を受けた後(出願認定を受けた後)、出願書類を提出します。

可否は、1次面接、2次面接、課題レポート等により決定されます。

なお、本年度の募集人員、エントリーシート(7月29日・8月25日)の提出状況、出願認定状況は、右表のとおりです。

提出状況、出願認定状況

	看護科	介護福祉科	医療保育科	計
募集人員	3	3	3	9
エントリー受付	24	16	28	68
出願認定	20	11	27	58

※アドミッション・オフィス(Admission Office=AO)型入試とは、大学側が志願者と早い時期から何度も面談を重ね、学力試験では測ることができない個性を評価すると同時に、アドミッション・ポリシーについて十分な説明を行い、相互に理解した上で入学してもらう制度である。略してAO型入試、AO入試ともいわれる。なお、AOとは直訳すると入学担当事務局となる。

(日本短期大学協会編集、短期大学教務必修 教務関係用語の解説より)

第19回 全国生涯学習フェスティバル まなびピア岡山2007 参加事業



川崎医療短期大学 第3回公開講座

平成19年11月3日(土・祝) 13:00~15:00

場所:川崎医療短期大学 体育館講義室

講演:認知症のケアについて~認知症のケアと介護保険~

講師:佐々木健
(きのこエスポアール病院 院長)
守屋真季
(川崎医療短期大学 介護福祉科 講師)

平成19年度

川崎医療短期大学 第2回公開講座

講演 注目される心機能検査
~狭心症・心筋症・不整脈とは~

平成19年10月13日(土) 10:00~11:30

場所/川崎医療短期大学体育館102号教室

講師/山本 誠一 川崎医療短期大学 臨床検査科 講師

川崎医療短期大学広報誌「若きいのち」 (58号)

平成19年9月発行

編集発行: 広報誌編集委員会

名木田恵理子 (一般教養・委員長)
藤原忠昭 (庶務課・副委員長)
橋本美香 (一般教養) 影本妙子 (看護科)
近末久美子 (臨床検査科) 天野貴司 (放射線技術科)
立花博之 (臨床工学科) 河邊聡子 (介護福祉科)
中井 靖 (医療保育科) 重政有里 (庶務課・書記)

写真協力: 二葉写真館

印刷: 友野印刷株式会社

皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。

〒701-0194

倉敷市松島316 川崎医療短期大学 広報誌編集委員会

電話: 086-464-1032 (庶務課)

Eメール: shomu@jc.kawasaki-m.ac.jp

ホームページ

http://www.kawasaki-m.ac.jp/jc/home/

編集後記

本学の「今」を伝える広報誌「若きいのち」の発行も三年目に入っています。前号から新しい編集委員も迎え、内容の充実、親しみやすい誌面づくりにさらに力を注いでおります。毎号編集作業の期間が短く、何かと気ぜわしい編集ではあります。が、よりよいものを、旬のうちにお届けしようと編集委員一同奮闘しております。

本号は、今年度から内容が充実された「オープンキャンパス」を特集しました。オープンキャンパスは教職員だけでなく、在学生の皆さんも多数力を発揮しており、その様子などもご紹介できたのではないかと思います。この号が出る頃には第四回までのオープンキャンパスを終えておりますが、受験生や保護者の皆さまには、本学を知ってもらうという手段としていただけただけです。幸い、第五回のオープンキャンパスは十月の学園祭時に開催する予定となっております。また少し違った雰囲気でのオープンキャンパスも味わっていただければいいのではないでしょうか。是非ご参加ください。

今回の号も多くの方々のご協力・ご支援によって、完成いたしました。特に今回から「キラリいい顔」という新コーナーを立ち上げ、学生や教職員など短大に関係する方々をクロージアアップして紹介したいと思っております。ご期待ください。

今後さらに成長を続け、皆さまのための広報誌でありたいと願っておりますので、ご協力・ご支援のほどよろしくお願いたします。

(近末久美子)